

初期近代英語における接続詞用法の *without*

THE USE OF *WITHOUT* AS A CONJUNCTION IN EARLY MODERN ENGLISH

小松 義隆 ・ 田島 松二

KOMATSU Yoshitaka, TAJIMA Matsuji

キーワード：接続詞用法の *without*、初期近代英語、シドニー、シェイクスピア

Key words : the conjunctive *without*, Early Modern English, Sidney, Shakespeare

要 旨

起源的には副詞や前置詞であった *without* を ‘unless’ の意味の接続詞として用いるのは今日では方
言もしくは卑俗と考えられているが、初期近代期（1500–1700）では標準語法であったと考えられている。
しかしこの見方は裏付けを欠いている。小論では、当時を代表する79人の作者による203の作品（散文、
詩、劇、等）にもとづいて、Skelton, Haws, Sidney, Jonson, Etherege, Congreve など一部の文人、
学者等が稀に使っているだけであり、標準語法と称されるほど一般化していなかったこと、下層民の台詞
にのみ使うシェイクスピアの用法は当時にとっては例外的なものであったことを明らかにした。

Abstract

The use of *without* as a conjunction meaning 'unless', which is branded as substandard, dialectal, or even vulgar in Present-day English, is considered to have been common or even 'in standard literary use' in the Early Modern English period (1500–1700). This generally held view lacks solid data, however. Based on an examination of 203 works written by 79 poets, dramatists, essayists, and other writers representing the period, this article argues that the conjunctive *without* was far from common, and indeed was rather rare, during the period. It was occasionally used by a few writers; and these included Skelton, Haws, Sidney, Jonson, Etherege, and Congreve. Shakespeare's use of it only in the speech of members of the lower class was unique or exceptional.

I

本来は副詞や前置詞である *without* が 'unless; if ... not' の意味の接続詞として使われるようになったのは、文献上は14世紀末である。この接続詞用法の *without* は初期近代英語 (Early Modern English, 1500–1700, 以下 Early ModE と略記) では比較的に見られたようであるが、18世紀に入ると書きことばでは稀になり、19世紀以降は話しことば以外ではほとんど使われなくなり、そこでも方言や卑俗な用法と考えられるようになっていく。筆者ら (小松・田島2020) は、先に、問題の用法が比較的起こるとされる時期と衰退期の境界に位置する18世紀英語における生起状況を観察した。その時感じたことは、18世紀以前の、比較的起こるとされる初期近代英語に関する実証データがほとんどないことであった。そこで、今回は、その初期近代英語を取り上げ、できるだけ多くの作品にあたり、どのような作者が、実際にどの程度、接続詞の *without* を使っているかを観察したいと思う。

II

'Unless' を意味する接続詞 *without* の歴史的盛衰については、ごく一部の辞書、文法書、語法書が簡単にふれているだけであり、本格的な研究はない。その数少ない知見については、先に小松・田島 (2020, pp. 106–107) でやや詳しく紹介したので、ここでは初期近代英語に関するものだけをごく簡単に紹介する。

歴史的原理に基づく大辞典 OED (1933, 1989², s.v. *Without* C. conj. 2.) は、初期近代英語に関しては16世紀から4例、17世紀から2例を記録している。古典的な語法書である Fowler's *Modern English Usage* (s.v. *without*) の初版 (1926) と改訂第2版 (1965) は、接続詞用法の *without* (= *unless*) について、"good old English, but bad modern English – one of the things that many people say, but few write;" と述べ、更に第3版 (1996) と第4版 (2015) では "Once (14–17c.) in standard literary use" と具体的に時期を明示している。つまり、小論で問題にしている16–17世紀の初期近代英語では書きことばとしては標準語法であったという訳である。近代英語に関する古典的な文法書とも言うべき Jespersen, *Modern English Grammar*, V (1940, § 21.5.7) は、15世紀末から20世紀初頭に至る例を著名な文人から9記録しているが、そのうち16世紀と17世紀の例はそれぞれ1である。アメリカ系の語法書 Webster's *Dictionary of English Usage* (1989, 1994², s.v. *without*) は、かつては完全に立派な ('once perfectly respectable') 用法であったが、18世紀までには Johnson が1755年刊の辞書で「(現在では)使われぬ」(1789年版では「会話以外では使われぬ」と特記するほど品 ('grace') のない語法になっていたという。「かつては」がいつの頃かが明示されていないが、18世紀以前、つまり16、17世紀では問題のない語法であったということであろう。以上が、初期近代英語における接続詞としての *without* にふれた数少ない文献から得られた見解である。

今日では、非標準語法、もしくは方言、卑俗な用法と見られている接続詞用法の *without* は、初期近代英語 (Early ModE) においてはふつうの、標準語法と考えられていたようである。しかし、実際にはどの程度見られたものなのか、どのような書き手が使ったものなのか、といった点などは不詳である。以下、そのあたりを明らかにしたいと思う。

III

中英語 (Middle English, 以下 ME) と初期近代英語 (Early ModE) の境界に位置する詩人 John Skelton (1460?–1529) や Stephen Hawes (c.1475–1530) から、初期近代英語 (Early ModE) と後

期近代英語 (Late ModE) の境界に位置する劇作家 William Congreve (1670–1729) に至るまで、時代的にはおおよそ1500年から1700年頃までに刊行された詩人、劇作家、学者、批評家等79人による203の作品を取り上げ、接続詞 *without* の生起状況を観察する。用例の大半は長年にわたるテキスト精読の過程で収集したものであるが、一部いわゆるコーパスを利用したものもある。(同義語の 'unless' や 'if ... not' などとの競合関係も調査すべきであったと思うが、この点については一部でふれるにとどめ、今後の課題としたい。)

我々の最大の関心は時代毎の大まかな生起数より、どの時代の、どの作者が、どの程度使っているかを確認することであるので、以下に、作者別、作品別の頻度数を、概略、執筆もしくは刊行年代順に示す。ただし、同一作者で数点ある場合は同一箇所にも列挙する。4点以上ある場合は Works と表記、作品数を () 内に示す。大まかに、16世紀と17世紀に分け、更にそれぞれを前半と後半に分けて見てゆく。

<16世紀 (1500–1600)>

16世紀前半 (1500–1550) :

Skelton, <i>The Complete Poems of John Skelton</i> (1483–1528)	5
Hawes, <i>The Pastime of Pleasure</i> (1509)	4
More, <i>Utopia</i> (1516. Robynson's transl., 1551)	0
Fisher, <i>English Works of John Fisher</i> (1520–1535)	0
Barclay, <i>The Boke of Codrus and Mynaclues</i> (1521)	0
Tyndale, <i>The Obedience of a Christen Man</i> (1528)	0
Elyot, <i>The Boke Named the Governour</i> (1531)	1
Heywood, John, <i>The Play of the Weather</i> (1533)	0
———, <i>The Four P.P.</i> (c1545)	0
———, <i>A Dialogue of Proverbs</i> (1546)	2
Wyatt, <i>Poetical Works</i> (a1542)	0
Ascham, <i>Toxophilus</i> (1545)	0
———, <i>The Affairs and State of Germany</i> (1553)	0
———, <i>The Scholemaster</i> (1570)	0

16世紀後半 (1550–1600) :

Sackville, <i>The Tragedy of Gorboduc</i> (1565)	0
Udall, <i>Ralph Roister Doister</i> (1566)	0
Gascoigne, <i>Supposes</i> (1573)	0
———, <i>The Steele Glas</i> (1576)	0
?Stevenson, <i>Gammer Gurton's Nedle</i> (1575)	0
Lyly, <i>Euphues: the Anatomy of Wit</i> (1578)	0
———, <i>Sapho and Phao</i> (1584)	0
———, <i>Endimion: the Man in the Moon</i> (1591)	0
———, <i>Mother Bombie</i> (1594)	0
Spenser, <i>The Shepheardes Calender</i> (1579)	0

——, <i>The Faerie Queene</i> (1590–1609)	0
Greene, <i>Pandosto: The Triumph of Time</i> (1588)	0
——, <i>The Scottish History of James the Fourth</i> (1598)	0
——, <i>Friar Bacon and Friar Bungay</i> (1594)	0
Puttenham, <i>The Arte of English Poesie</i> (1589)	0
Nashe, <i>The Anatomy of Absurdities</i> (1589)	0
——, <i>Pierce Penniless</i> (1592)	0
——, <i>The Unfortunate Traveller</i> (1594)	0
——, <i>Summer's last Will and Testament</i> (1600)	0
Lodge, <i>Rosalynde: Euphues Golden Legacie</i> (1590)	0
Sidney, <i>Arcadia</i> (The Old Arcadia, 1590)	10
——, <i>Arcadia</i> (The New Arcadia, 1590–93)	20
——, <i>Astrophel and Stella</i> (1591)	1
——, <i>The Defence of Poesy</i> (1595)	1
Barnfield, <i>The Affectionate Shepherd</i> (1594)	1
Drayton, <i>Endimion and Phoebe</i> (1594)	0
Kyd, Thomas, <i>The Spanish Tragedy</i> (1594)	0
Chettle, <i>Piers Plainness: Seven Years' Prenticeship</i> (1595)	1
Peele, <i>The Old Wives' Tale</i> (1595)	0
Davies, <i>Orchestra: or, a Poem of Dancing</i> (1596)	0
Raleigh, <i>The Discovery of Guiana</i> (1596)	0
Deloney, <i>Jack of Newberie</i> (1597?)	0
——, <i>The Gentle Craft, Parts I & II</i> (1597–8?)	0
——, <i>Thomas of Reading</i> (a1600)	0
Marlowe, Works (7) (1590–1600)	0
Shakespeare, Works (41) (1590–1613)	3

16世紀全体における生起状況を一見した印象は、接続詞用法の *without* が予想外に少ないことである。16世紀初頭の Skelton と Hawes の詩作品、16世紀末の Sidney の作品に目立つくらいである。前半では調査した10人（14作品）のうち4人（4作品）、後半では21人（82作品）中4人（9作品）しか使っていない。14世紀末に初出し、1世紀余を経た後でも十分に発達しているとは言いがたく、一部で好まれたところであろう。16世紀の前半と後半をもう少し詳しく見てみよう。

16世紀の前半では、More, Fisher, Tyndale, Ascham らの散文、Wyatt の詩には見られず、先にふれた Skelton と Hawes の詩、Elyot と John Heywood の散文に起こるだけである。Skelton と Elyot からそれぞれ1例挙げるが、引用文冒頭の（ ）内に示した数字は作品の刊行年（もしくは執筆年）を示し、下線等は筆者らのものである。

- (1) (1516) Without our ship be sure, it is likely to brast, (Skelton, *Complete Poems*, p. 244)
- (2) (1531) ... but he will not take pains to teach without he may have a great salary, (Elyot, *The Boke named The Governor*, p. 44)

また、*without* が *that* を伴った例も Hawes に 1 見られる。

- (3) (1517) Without that you in your mynde wyll repayre / It for to spende in Ioye and pleasaunce (Hawes, *The Pastime of Pleasure*, 3988–9)

16世紀後半では、Udall, Gascoigne, Spenser と言った劇作家や詩人、更には、Shakespeare 以前の劇壇を盛り立て、Shakespeare に及ぼした影響は少なくない 'University Wits' (「大学才人」) と称される Lyly, Marlowe, Greene, Lodge, Kyd, Peele といった Oxford や Cambridge 出身の劇作家たちの作品には全く見られない。ごく一部の詩人や散文作者が使っているに過ぎないが、ひときわ目立つのはエリザベス朝の詩人・廷臣・軍人 Sir Philip Sidney (1554–86) である。散文ロマンス *Arcadia* の初版 (*The Old Arcadia*) に 10 例、その改訂版 (*The New Arcadia*) に 20 例見られるが、ソネット集 *Astrophel and Stella* と詩論 *The Defence of Poesy* にもそれぞれ 1 例起こる。(ちなみに、*unless* はどの作品でも全く使われていない。) そのうちの 2 例を次に示す。

- (4) (1590) 'I tell you', saith Dametas, 'it is not for me to be an officer without I may be obeyed.' (Sydney, *Arcadia* (*The Old Arcadia*), p. 34, ll. 13-14)
- (5) (1591) Driven else to grant, by angel's sophistry, / That I love not, without I leave to love. (Sydney, *Astrophel and Stella*, 61.13-14)

上述したようにエリザベス朝を代表する劇作家たちが全く使わないのに対して、膨大な作品数のある Shakespeare は 3 つの劇で、それぞれ 1 回ずつ使っている。(他方、*unless* は全体で 160 回以上使っている。)

- (6) (1592–3) *Dro.* A very reverent body: ay. Such a one as a man may not speak of without he say "Sir-reverence." (*The Comedy of Errors*, III.ii.90-91)
- (7) (1594–5) *Speed.* Without you? nay, that's certain; for without you were so simple, one else would: (*The Two Gentlemen of Verona*, II.i.36–7)
- (8) (1598–9) *Dog.* Five shillings to one on't, with any man that knows the [statues], he may stay him: marry, not without the Prince be willing, (*Much Ado about Nothing*, III.iii.78–80)

通常は *unless* を使う Shakespeare であるが、上に挙げた 3 例においては、(6) は召使い (*bondman*)、(7) は小姓 (*page*)、(8) は警吏 (*constable*)、といったいわゆる下層民の台詞で使っている。この点は Jespersen (1940, § 21.5.7) が夙に指摘しているところでもあるが、今日的な「卑俗 (*vulgar*) 用法」という見方の先駆的な例と言えるかも知れない。

<17世紀 (1600–1700)>

17世紀前半 (1600–1650) :

Dekker, *The Shoemaker's Holiday* (1600)

1

——, <i>The Honest Whore</i> , Part I (1604) & Part II (1630)	0
——, <i>The Gull's Hornbook</i> (1609)	0
Jonson, <i>Works</i> (8) (1600–1631)	4
Breton, <i>Pasquils Passe and Passeth Not</i> (1600)	0
——, <i>Characters</i> (1615)	0
——, <i>Strange News out of Divers Countries</i> (1622)	0
Campion, <i>Observations in the Art of English Poesie</i> (1602)	0
Marston, <i>Works</i> (5) (1602–1606)	0
Daniel, <i>A Defence of Rhyme</i> (1603)	0
Camden, <i>Remaines of a Greater Worke concerning Britaine</i> (1605)	0
Chapman, <i>Works</i> (4) (1605–1613)	0
Bacon, <i>The Advancement of Learning</i> (1605)	0
Heywood, Thomas, <i>Works</i> (5) (1607–1633)	0
Middleton, <i>Works</i> (5) (1607–1657)	0
Greville, <i>The Tragedy of Mustapha</i> (1609)	0
——, <i>The Life of the Renowned Sr Philip Sidney</i> (1652)	0
Donne, <i>Works</i> (7) (1611–1633)	0
Tourneur, <i>The Atheist's Tragedy</i> (1611)	0
Webster, <i>The White Devil</i> (1612)	1
——, <i>The Duchess of Malfi</i> (1623)	1
——, <i>The Devil's Law-Case</i> (1623)	0
Beaumont & Fletcher, <i>Works</i> (4) (1613–1620)	2
Browne, William, <i>The Shepherds Pipe</i> (1614)	0
Burton, <i>The Anatomy of Melancholy</i> (1621)	0
Massinger, <i>Works</i> (4) (1624–1658)	0
Ford, <i>Works</i> (4) (1629–1634)	0
Herbert, George, <i>The Temple</i> (1633)	0
Milton, <i>Works</i> (6) (1634–1671)	0
Shirley, <i>The Traitor: a Tragedy</i> (1635)	0
Evelyn, <i>The Diary of John Evelyn</i> (1641–1706)	0
Browne, Thomas, <i>Religio Medici</i> (1643)	0
Vaughan, <i>The Works of Henry Vaughan</i> (1646–54)	0
Herrick, <i>Hesperides</i> (1648)	0
17世紀後半 (1650–1700) :	
Carew, <i>Poems</i> (1651)	0
Hobbes, <i>Leviathan</i> (1651)	0
Walton, <i>The Compleat Angler</i> (1653)	0
Lovelace, <i>Lucasta: Posthume Poems of R. Lovelace</i> (1659)	0
Pepys, <i>The Diary of Samuel Pepys</i> (1660–1669)	0

Cavendish, <i>Observations upon Experimental Philosophy</i> (1666)	1
Crashaw, <i>Steps to the Temple</i> (1670)	0
Dryden, <i>The Conquest of Granada</i> (1672)	0
——, <i>Marriage a la Mode</i> (1673)	0
——, <i>All for Love</i> (1678)	0
Wycherley, <i>Love in a Wood</i> (1672)	0
——, <i>The Gentleman Dancing-Master</i> (1673)	0
——, <i>The Country Wife</i> (1675)	1
——, <i>The Plain Dealer</i> (1677)	0
Traherne, <i>Roman Forgeries</i> (1673)	0
Lee, <i>The Tragedy of Nero</i> (1675)	0
Etherege, <i>The Man of Mode</i> (1676)	4
Bunyan, <i>The Pilgrim's Progress</i> (1678–84)	0
Marvell, <i>The Poems & Letters of Andrew Marvell</i> (1681)	0
Otway, <i>Venice Preserv'd</i> (1682)	0
Butler, <i>Hudibras in three parts</i> (1684)	0
Behn, <i>Oroonoko, or the Royal Slave</i> (1688)	0
Locke, <i>Two Treatises on Civil Government</i> (1690)	0
Congreve, <i>Works</i> (5) (1693–1701)	5
Fox, <i>The Journal of George Fox</i> (1694)	0
Vanbrugh, <i>The Relapse</i> (1697)	0
——, <i>The Provok'd Wife</i> (1697)	0

17世紀においても、先に見た16世紀同様、全体的には稀としか言いようがない状況を呈している。前半では調査した27人（76作品）のうち4人（9作品）、17世紀後半では21人（31作品）中4人（6作品）しか使っていない。

17世紀前半を具体的にみてみると、Marston, Chapman, Thomas Heywood, Middleton, Tourneur, Massinger, Fordなどの劇作家、Donne, Milton, Herbert, Herrickなどの詩人、哲学者Bacon, 医師のThomas Browneなどは全く使っていない。劇作家のDekker, Jonson, Webster, Beaumont & Fletcherに計9例見られるだけである。Jonsonの用例が多い印象を与えるが、調査した8戯曲のうちの3つ、つまり*Catiline*に2、*Epicene*に1、*Bartholomew Fair*に1の計4例である。身分・階層による使い分けがあるかどうかを見てみると、Dekkerの1例は靴職人の台詞である（ちなみに*unless*の例はない）。Websterも2例のうち1例は公爵の従者の台詞で使っているが、残る1例と、Beaumont & Fletcherの2例はいずれも上流階級の台詞に起こる。Jonsonの場合、（全体的には*unless*がやや多いが）*without*の例は、Shakespeareのそれと異なり、下例(9)のように劇中の口上(chorus)や、(10)のように上流階級の台詞で使われている。

- (9) (1611) Such ruin of her manners Rome / Doth suffer now as she's become — / Without the gods it soon gainsay—— / Both her own spoiler and own prey (Jonson, *Catiline*, II.583–6 [chorus])

- (10) (1612?) *TRUEWIT*: I cannot help it, without I should take the quarrel upon myself;
(Jonson, *Epicene*, IV.v.276–7)

17世紀後半では Walton, Pepys, Locke, Fox などの散文、Dryden, Otway, Vanbrugh などの戯曲、Lovelace, Butler, Marvel などの詩には起こらず、わずかに哲学者・科学者 Cavendish の散文と、Wycherley, Etherege, Congreve の戯曲に見られるだけである。Etherege と Congreve はこの接続詞を比較的好むように思われるが、侍女の台詞に起こる下例 (12) を除けば、他はいずれも上流階層の台詞に起こる。

- (11) (1666) I have declared in my former discourse, that there is no colour without body, nor a body *without* colour; for we cannot think of a body without we think of colour too.
(Cavendish, *Observations upon Experimental Philosophy*, p. 88)
- (12) (1676) Condemned she is; and what will become of her I know not, without you generously engage in a rescue. (Etherege, *The Man of Mode*, V.ii.108-99)
- (13) (1695) and if he can't be cured without I suck the poison from his wounds, I'm afraid he won't recover his senses till I lose mine. (Congreve, *Love for Love*, p. 276)

17世紀全体を見ても、一部の作者が稀に使っているだけであり、一般的であったとは到底言えない状況である。使われている場合も大半が上流階層の台詞や文人・学者の散文に起こる例であり、16世紀のところでふれた、下層民の台詞だけに使う Shakespeare の用法はむしろ例外的である。

IV

以上、初期近代英語 (Early ModE, 1500–1700) を代表する作家、作品を中心に、79人の作者による203の作品を調査した。200年を通観しても、50年毎を見渡しても、接続詞 *without* を使っている作者は約2割、作品数に至っては1割強である。8割の作者は全く使っていない。初期近代英語における接続詞 *without* に関する唯一の所見ともいえるべき、Fowler, *Modern English usage*^{1~4} (1926~2015, s.v. *without*) の 'good old English, but bad Modern English' とか、14–17世紀では 'standard literary use' であったという評言をそのまま受け入れるわけには行かないような調査結果である。Skelton, Haws, Sidney, Jonson, Congreve など一部の詩人、劇作家等が稀に使っているだけであり、一般化、確立した用法であったとは言いがたい。また、今日見るような方言もしくは卑俗といった語法上の使い分けも見られず、下層民の台詞だけに使う Shakespeare の「卑俗」用法はユニークあるいは例外的なものであった、と言える。

14世紀末に芽を出したものの、100年、更には200年経っても大きく開花することなく、時折、小さな花をところどころで咲かせたというところであろうか。

参考文献

調査した原典テキストは、主に Oxford Standard Authors, The World Classics/Oxford World Classics, Penguin Classics, The Revels Plays, Regent Restoration Drama Series, Regent Renaissance Series, The New Mermaids 等の叢書所収のものが大半であるが、全てを列挙すると数頁に及ぶので、以下、実例を引用した文献だけを挙げる。Online 検索で利用したサイトは Early English Books

Online, Renaissance Editions, Gutenberg Project, Questia である。

(1) 第一次資料 (引用文献のみ)

- Cavendish, Margaret (c.1623–1673), *Observations upon Experimental Philosophy*, ed. Eileen O'Neill. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- Congreve, William (1670–1729), *The Way of the World and Other Plays*, ed. Eric S. Rump. (Penguin Classics.) London: Penguin Books, 2006.
- Elyot, Sir Thomas (c.1490–1546), *The Boke named The Governour*, ed. S. E. Lehmborg. London: J. M. Dent, 1962.
- Etherege, Sir George (1635–1691), *The Man of Mode*, ed. W. B. Carnochan. London: Edward Arnold, 1966.
- Hawes, Stephen (c.1475–1523?), *The Pastime of Pleasure: a literal reprint of the earliest complete copy (1517)*, ed. William Edward Mead. EETS OS 173 (1927).
- Jonson, Ben (1572–1637), *Catiline*, ed. W. F. Bolton and Jane F. Gardner. (Regents Renaissance Drama Series.) London: Edward Arnold, 1973.
- , *Volpone, or the Fox; Epicene, or the Silent Woman; The Alchemist; Bartholomew Fair*, ed. Gordon Campbell. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Shakespeare, William (1564–1616), *The Riverside Shakespeare*, 2nd ed., ed. G. Blakemore Evans. Boston & New York: Houghton Mifflin, 1997.
- Sidney, Sir Philip (1554–1586), *The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)*, ed. Jean Robertson. Oxford: Clarendon Press, 1973.
- , *Astrophel and Stella, in Sir Philip Sidney, The Major Works*, ed. Katherine Duncan-Jones. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1989, pp. 153–211
- Skelton, John (1460?–1529), *The Complete Poems of John Skelton, Laureate*, 4th ed. Philip Henderson. London: J. M. Dent and Sons, 1964 (1931¹).

(2) 第二次資料 (言及文献のみ)

- Fowler, H. W. 1926, 1965², 1996³, 2015⁴. *A Dictionary of Modern English Usage*. 1st ed.; 2nd ed., rev. by Ernest Gowers; 3rd ed. [*The New Fowler's Modern English Usage*], ed. by R. W. Burchfield; 4th ed. [*Fowler's Dictionary of Modern English Usage*], ed. by Jeremy Butterfield. Oxford: Oxford University Press.
- Jespersen, Otto. 1940. *A Modern English Grammar, Part V*. London: George Allen & Unwin.
- Johnson, Samuel. 1755. *A Dictionary of the English Language*, 2 vols. London; repr., Tokyo: Yushodo, 1983.
- MED = *Middle English Dictionary*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 1952–2001.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press, 1933, 1989².
- Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, MA: Merriam-Webster, 1989.

小松義隆・田島松二. 2020. 「18世紀英語における接続詞用法の without」『研究紀要 青葉』(仙台青葉学院短期大学) 第11巻第2号, pp.105–112.